

石造美術オタクの

ひとり言 ② 宝篋印塔



高橋晋也／庵治産地の石材加工メーカーである(有)翼石材 企画室に籍を置き、平成21年より、究極のこだわり製品として「世伝石塔」シリーズを開発、総合プロデューサーとして庵治・牟礼産地の優れた加工技術を持つ「庵治石工衆」によって制作している。中世の石造物をこよなく愛し、今年4月からは、中世の石塔を中心に勉強をする会、「翼塾」を開講。

こんにちは、(有)翼石材・企画室の高橋です。前回と同じことを書かせていただきますが、私は仏教・お墓の専門家でも学者でもありません。あくまで一石材店であり、ただの石造美術オタクであります。これから述べるお墓の話につきましてもいろいろな指摘もあるとは思いますが、ただの石造美術オタクの独り言としてご理解いただければ幸いに存じます。

そして今さらですが、この企画の趣旨は一般の方でもご理解いただけるようなお墓の話を書いてほしいとのことでした。そこで前回の記事を、一番身近な一般の人ということと、私の妻に読んでもらいました。どうかかなあと心配していたところ、意外に「ふくん、そうだったんやね。」と理解してもらい一安心しました。というわけで、前回の感じで、今回は宝篋印塔についてお話をさせていただきます。

日本の在銘最古の宝篋印塔は、鎌倉時代中期正元元年銘(1259年)の奈良県生駒市の興山往生院宝篋印塔です。宝篋印塔は五輪塔とともに長きにわたり親しまれてきたお墓供養塔であり、鎌倉時代後期に全盛期を迎え全国に普及しています。

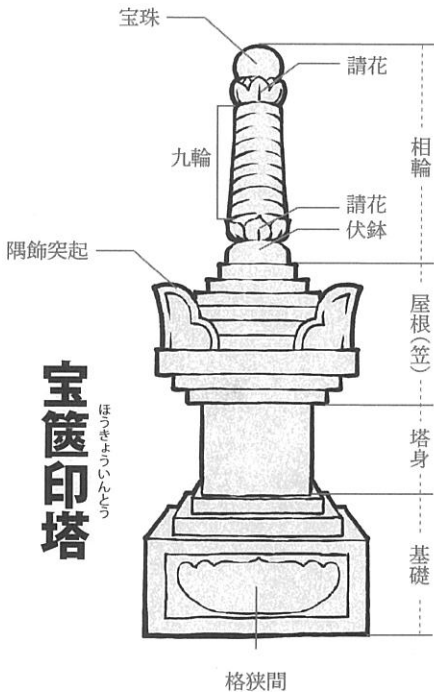
はじめに宝篋印塔の起源について説明します。古代インドの阿育王(アショーカ王)が仏教に帰依し、インド全土に仏舍利塔を建立しました。その故事にならって、中国の呉越国王 銭弘偈が八万四千基の金銅製の小塔「銭弘偈八万四千塔(金塗塔)」を十年かけて作り「宝篋印陀羅尼經」の刷本を塔中に納めて諸国に頒布し、それが日本にも請来されました。のちに、日本では「宝篋印陀羅尼經」を納置する塔を「宝篋印塔」と呼称するようになりました。

「宝篋印陀羅尼經」の正式名称は「一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經」です。これを簡単に説明すると、一切如来の全身舍利(＝仏舍利)の功德が積聚(種々のものが一つに積み重なること)された陀羅尼(＝法舍利)を奉安した(納めた)宝の篋(＝宝篋)ということになります(法舍利は経巻(經典)や写経のことで、仏舍利と同等とみなされます)。また、印とは目印の意味ですから、宝篋印とは如来の功德聚を美しい容器(＝宝篋)に納め、表したものです。つまり、宝篋印塔は単に「宝篋印陀羅尼經」を納める「納経塔」ということだけではなく、如来の功德聚を表している塔といえます。

では、なぜ仏舍利や法舍利を奉安するのかというのですが、それは仏舍利や法舍利の功德を廻向することによって利益と幸せ(救済)を実現させてくれるからです。ここで重要なのは「宝篋印陀羅尼」には「滅罪」(己の犯した罪を除滅すること)が含まれているということ。例えば、現世で犯した罪などの行為「苦」は、来世

で果報(過去の行為を原因として、現在に結果として受ける報い)となって現れてしまいますが、宝篋印塔を礼拝供養することで、成仏し極楽浄土へ往生することが出来ます。また、地獄に堕ちた死者は、その子孫が宝篋印塔を礼拝供養すれば、成仏し、極楽浄土へ往生することが出来るのです。このように、宝篋印塔は利益と幸せ(救済)と滅罪という確固たる仏塔思想があったからこそ日本全国に普及し、今日でも多くの遺品が残されているのだと思います。

現在、お墓のかたちは和墓や洋墓などの一般的なお墓のほかにも本人や遺族の希望に沿った形樹木葬・納骨堂など、幅広く選べるようになっています。もちろん、時代の流れとともに人々の考え方や世の中の常識が変わり、葬送文化が変化していくことはごく自然なことです。ただ、こうして宝篋印塔の仏塔思想を見つめ直してみますと、良きお墓文化を残せたいいなとしみじみ思っています。



宝篋印塔



高山寺宝篋印塔

今回ご紹介する宝篋印塔は京都市右京区にある鎌倉時代中期の高山寺宝篋印塔です。『高山寺縁起』にみえる暦仁二年(1239年)造立の阿育王塔を模して造立されたという明恵上人の髪爪塔という説があります。特徴としては、基礎は低く、塔身は縦長です。笠の隅飾りは別石造りで二孤馬耳形とし、直立しています。総高は248cm。この石塔は、日本における宝篋印塔の早期の様式を示し、宝篋印塔の成立を考える上で、非常に重要な塔です。